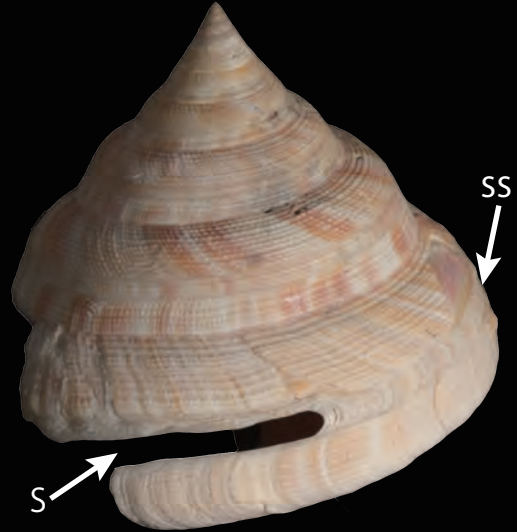
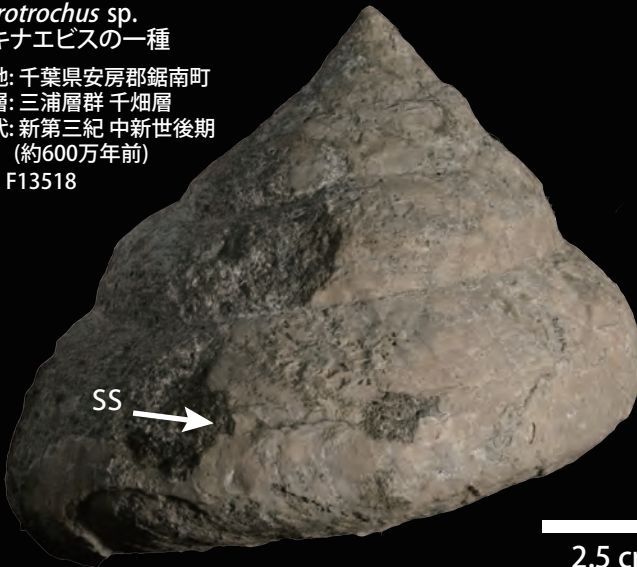


生きている化石

## オキナエビス

*Perotrochus* sp.  
オキナエビスの一種

産地: 千葉県安房郡鋸南町  
地層: 三浦層群 千畑層  
時代: 新第三紀 中新世後期  
(約600万年前)  
GSJ F13518



*Mikadotrochus (Perotrochus) hirasei*  
ベニオキナエビス

産地: 土佐沖(時代: 現世)  
生息域: やや温暖でやや深い海  
食性: 海綿の他、ウミユリやサンゴ

GSJ F7670

オキナエビス類(科)はカンブリア紀後期(約5億年前)から現在までほとんど姿が変わっておらず、生きている化石として著名である。石炭紀をはじめ古生代・中生代に繁栄したが現在では約30種が知られている。この仲間の特徴は殻口にあるスリット(矢印S)で、ここに軟体部の排泄孔が位置し、呼吸にも使われる。成長とともにスリットは塞がれていくが(矢印ss)、捕食者に対する防衛には不向きで、今の巻貝の多くにはスリット自体がなく、オキナエビス類は原始的な形質が残った巻貝といえる(古腹足目)。

オキナエビスが西洋に知られるのは、1875(明治8)年、東京大学の医学教師ヒルゲンドルフ(ドイツ人)が江の島の土産物屋で購入して自国に持ち帰り、1877年に新種 *Pleurotomaria beyrichii* として発表して以降になる。一方で日本では本草学者 武蔵石寿の貝類図鑑『目八譜』(1843(天保14)年)に「戒介の老丈たるものなるべし、または別種」の翁蛭子として既に図示されていた(巻之七、品之二。図示された特徴から *P. beyrichii* と同定された)。

ヒルゲンドルフの発表後、各国から入手希望があり、大英博物館からも東京大学に採集の依頼があった。神奈川県三崎の東京大学臨海実験所の採集人 青木熊吉が採集し、教授の飯島・箕作に持参したところ、報酬として金40円を得た。当時の宿代は2銭で、彼の「長者になったようだ」という感想から、長者貝の別名がつけられたといわれる\*。

地質標本館では現生と化石のオキナエビス類を第1展示室(生きている化石コーナー)に展示している。

\*小学館日本大百科全書・奥谷喬司; 原色図鑑世界の貝類・鹿間時夫、他より

(地質標本館室 林和彦)